

授業で使える当館所蔵地図

No.2 『官版実測日本地図』
 作成年：1870（明治3）年
 サイズ：206×83、197×156、
 228×154、191×138 cm
 版元：大学南校

★3

★2

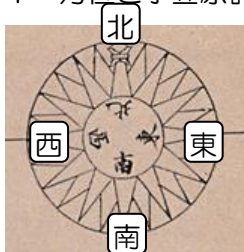
★1



【解説】

1816（文化 13）年，伊能忠敬とその測量隊による測量が完了し，忠敬の意思を受け継いだ高橋景保のもと「大日本沿海輿地全図」が作成され，1821（文政 4）年，幕府に献納された。伊能図とよばれるこの図は小図（1:432,000），中図（1:216,000），大図（1:36,000）からなり，日本全図は各々3枚，8枚，214枚で構成される。伊能図をもとにした日本図が出版されるのは幕末になってからで，1867（慶応 3）年，幕府開成所から伊能小図を基盤とした「官板実測日本地図」が刊行された。「北蝦夷（樺太）」「蝦夷諸島（北海道・南千島）」「畿内 東海 東山 北陸」「山陰 山陽 南海 西海」の4分割で編集され，前の2図は間宮林蔵，松浦武四郎などの資料を補足して作成された。掲載の図は，1870（明治 3）年，幕府開成所を引き継いだ大学南校が再版したものである。伊能図は以後，1877（明治 10）年刊行の「大日本全図」（陸軍参謀局），1890（明治 13）年刊行の「大日本国全図」（内務省地理局）および1884（明治 17）年刊行の「輯製二十万分一地図」（測量局）などに使われていく。

★1 方位と小笠原群島総図



地図上に東西南北の方位が円状に記載されている。初版から第三版までの図には記載されているが，第四版からはこれがすべて削除された。

小笠原群島は，北から聳島列島・父島列島・母島列島の3つの列島から成る。なお，小笠原諸島には他に，西之島・火山列島・南鳥島・沖ノ鳥島が含まれる。このため小笠原「諸島」と小笠原「群島」はしばしば混同される。

★2 地名と地形

飛騨、美濃、尾張、近江といった国名から大野郡、土岐郡、益田郡などそれぞれの街道筋における詳しい地名など現在の市町村名に通ずる地名が記されている。また、御岳や駒ヶ岳などの山の名前や海岸線にある地名などが細かく記されている。特に、海岸線の地形は精巧に描かれ、現在の地形との比較や変遷を知る上で有効な地図である。

★3 地図記号



- 国名＝美濃、尾張、近江など当時の国名が記されている。
- 郡名＝山県郡、武儀郡、加茂郡など地域の郡名が記されている。
- 城郭＝特定の地域を外敵から守るために施した防御施設、またその地域の政治施設としても使われた。
- 陣屋＝郡代、代官または旗本などの居所。
- 国界＝国の境
- 郡界＝郡の境
- 驛＝一定の距離をおいて、次々と連ねて設けた中継所。また旅行中、馬を乗り継ぐ所。宿場。
- 港 ○神社
- 佛閣＝寺の建物、寺院

【用語について】

○大学南校

東京大学の前身。旧幕府の開成所が 1869 年（明治 2）に改称したもの。西欧文化の導入に努めた。1877 年東京医学校と統合され、東京大学となる。

○官版実測日本地図と伊能図の比較

※蝦夷諸島版の場合	官版実測日本地図	伊能図
クナシリ島	全島描写する	西南部のみ実測描写
エトロフ島	全島描写する	描写なし
色丹島・歯舞諸島	全島描写する	色丹島のみ遠望描写
小島・大島・ラクシリ島 ライシリ島・レフンシリ島	平面図として描写する	遠望として描写する
蝦夷地本島 函館～恵山～ 鷲の木・知床半島北東部	実線で描写する	未測量のまま
蝦夷地本島内陸部	全内陸に山地・河川・沼を描写する	石狩低地等三本の道と遠望の七山を描写する

蝦夷諸島版では伊能図にはクナシリ島までしか描写がない。しかしエトロフ島やカラフト島の北緯 50 度までは我が国付属の島々であること、他の地域でも小笠原諸島や琉球国などの我が国の属島を省けば、外国人に渡す際に不都合になることなど意見が交わされた。そこで琉球国、竹島、エトロフ島以東の島々、カラフト島の 50 度以北などには着色して識別されている。伊能図で測量されていない地は当時の外国から伝来した精密な図を参考とし、外国人が命名した地は一切使用しないなどの取り決めがされた。

○伊能忠敬

江戸時代、日本国中を測量してまわり、初めて実測による日本地図を完成させた。忠敬は、延享 2 年（1745 年）現在の千葉県九十九里町で生まれ、17 歳で伊能家当主となり、佐原で家業のほか村のため名主や村方後見として活躍した。その後、家督を譲り 50 歳で江戸に出て、55 歳（寛政 12 年、1800 年）から 71 歳（文化 13 年、1816 年）まで 10 回にわたり測量を行った。その結果完成した地図は、極めて精度の高いもので、ヨーロッパで高く評価され、明治以降国内の基本図の一翼を担った。

○測量隊による測量

伊能忠敬は、天文学に興味をもち、天体を使った緯度・経度の知識や方位磁石の知識をもっていたことと、日本で行われていた「検地」の測量技術を使って日本を回った。忠敬の測量は、主に「導線法（どうせんほう）」とよばれる方法で行われた。そして、くるいが大きくならないように、ときどき遠くの目標（もくひょう）となる山などを測って修正した。「導線法」では、距離を藤（ふじ）つるや竹でできた「ものさし」や、「歩測（ほそく）」で測った。「歩測」とは、歩く幅を一定（いっぺい）にして、目標の場所までの歩数（ほすう）から、距離（きょり）を求めた。次に、海岸などの曲がり角に立てた、梵天（ぼんてん）とよばれる竹竿（たけざお）を使用して、前の地点から目標点への角度（かくど）を「小方位盤（しょうほういばん）」などで測った。そして、時々富士山などの目標となる高い山や、星を「小方位盤」、「象限儀（しょうげんぎ）」などで測り、測量のくるいを修正した。

【利用の例】

○官版実測日本地図や伊能図とそれ以前に作成された地図、現代の日本地図との比較

- （例）「校正日本輿地全図 1826（文政 9）年」の日本地図と比較し、海岸線の精巧さや街道筋の細かさについて知る。また、校正日本輿地全図においても官版実測日本地図においても方位や緯度経度、地図記号が示されており、当時の進んだ技術で描かれたものである事実も捉えることができる。
- 現代の日本地図と重ね合わせ、地形や海岸線、周辺の諸島が正確に記され、現在と大きく変わらない地図に描かれるだけの測量がなされていることを知ることができる。
- 現代の日本地図と比較し、海岸線の違いに着目することができる。現在にかけてどのような地域で海岸線の埋立地が形成されているかを知ることができる。
- 伊能図における伊能忠敬の功績を知るとともに、伊能図をもとにした地図として、さらに周辺諸島や内陸部の地名を加えられた当時の最も正確な地図が描かれていることに気付くことができる。

○当時の国名、郡名、驛名などを知る

- 現在の岐阜県の位置と比較し、国名や郡名、それぞれの地域における驛名の細かく描かれた点に着目させ、自分の住んでいる地域がどのように描かれているかを確認する。